

為永考
國

カ
ハ

十三

傳

文
堂



花
之
車

Gōkan: (No. 016)
Fanayomi Hakke
Part 3, BOOK 1

13
3701
13



門へ13
號3701
卷13



生著述者に主傳（小冊）と表題を假字読大傳といふ開を
 時の戯墨（伏姫富士）自殺後を并に堀口より飛び去りし白氣
 侶に立消るるの玉に這策子と人跡もあらずたゞ思ひけほ
 大村大井の列傳（燦）燦めや歳々編數積り十三編をや六犬士出現して大坂
 冊子ありし長らくも遠くも遮莫嚮ゆと言へりついで素りたる
 餘はよみしあき爰ふつり考ふれを水滸傳の大筆をもも軍旅攻伐も今
 業ありし今多三個に助友の闘戦さへ草双紙の同ト画組の重りや
 く困ト果する候備這まふ編を重みて毛野が名よあへ八百人水陸三隊
 大合戦は條よいへ奈何やせんと思ひあがると膽太く稍這輯成編
 果せし嘉永と祝せしあき其の三檢て春水ありし
 前年は睦月梅花中筆を紙りて

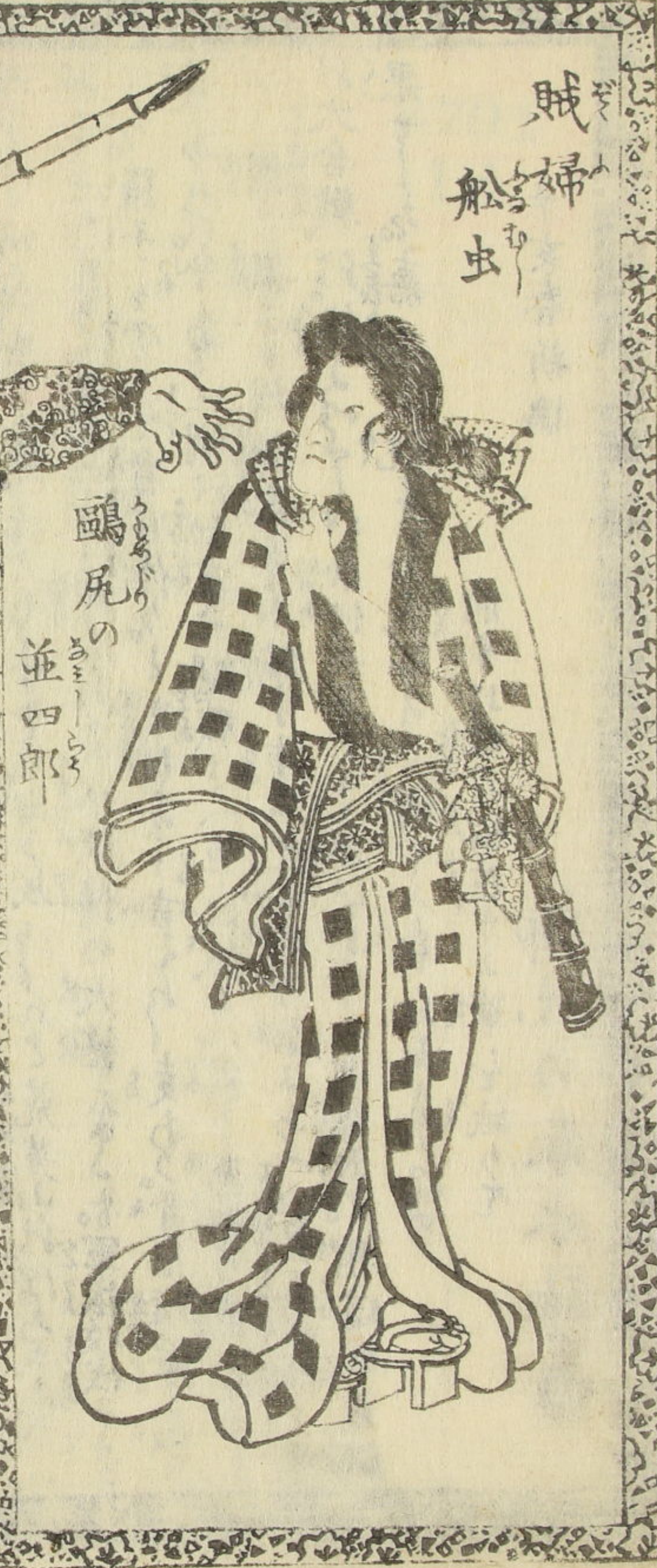
辛亥春新編

柳北の春水誌

八傳三編

八之巻三編

一 鎗 我 刺 過 て
並 四 郎 野 猪 注
牙 小 掛 ら 新 支
本 文 小 委 し



賊 婦
船 虫

鷗 尻 の
並 四 郎

今 作 三 編

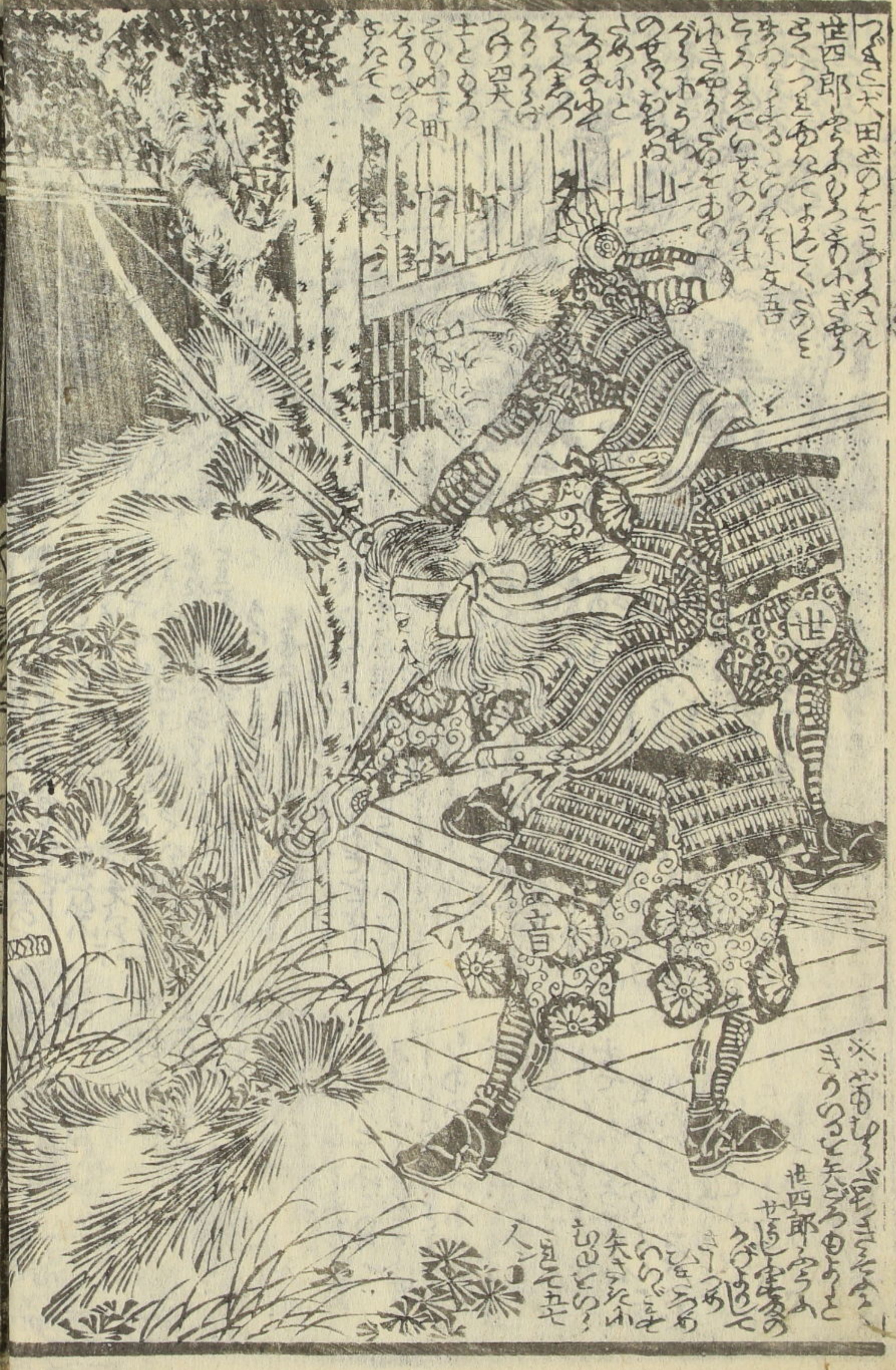


Handwritten text in Japanese characters, likely a poem or commentary related to the illustration. The text is written in a cursive style and is positioned to the right of the man's figure.

白井



Large block of handwritten text in Japanese characters, likely a poem or commentary. The text is arranged in several columns and is positioned below the landscape illustration.





此の馬は
 名馬なり
 其の速さ
 朝敵を
 追ひつゝ
 其の力
 大なるに
 驚かす
 其の馬
 名は
 白馬と
 云ふ

此の馬は
 名馬なり
 其の速さ
 朝敵を
 追ひつゝ
 其の力
 大なるに
 驚かす
 其の馬
 名は
 白馬と
 云ふ

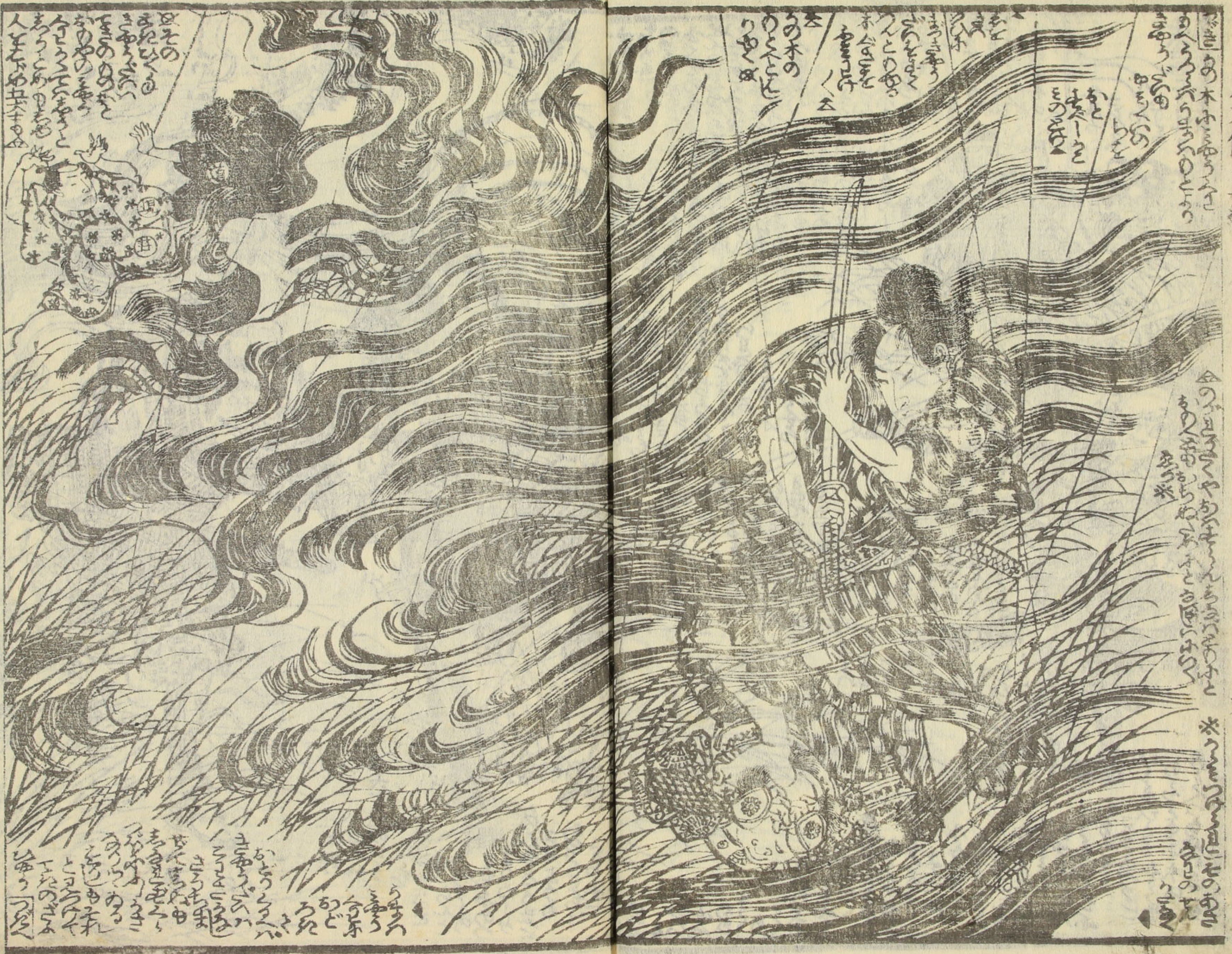


此の馬は
 名馬なり
 其の速さ
 朝敵を
 追ひつゝ
 其の力
 大なるに
 驚かす
 其の馬
 名は
 白馬と
 云ふ

此の馬は
 名馬なり
 其の速さ
 朝敵を
 追ひつゝ
 其の力
 大なるに
 驚かす
 其の馬
 名は
 白馬と
 云ふ

此の馬は
 名馬なり
 其の速さ
 朝敵を
 追ひつゝ
 其の力
 大なるに
 驚かす
 其の馬
 名は
 白馬と
 云ふ

此の馬は
 名馬なり
 其の速さ
 朝敵を
 追ひつゝ
 其の力
 大なるに
 驚かす
 其の馬
 名は
 白馬と
 云ふ



大傳十三編

六傳三編

此の
人
は
...

...

...

...

...

...

...



ノチノ...

右の...
左の...
上の...
下の...

小文吾...
大文吾...
...



右の...
左の...
上の...
下の...

大文吾...
小文吾...
...

此のうしは、昔のうしに
 比し、大に肥え、皮も
 厚く、肉も多し。昔の
 うしは、皮も薄く、肉も
 少し。其の故、何れに
 在らん。

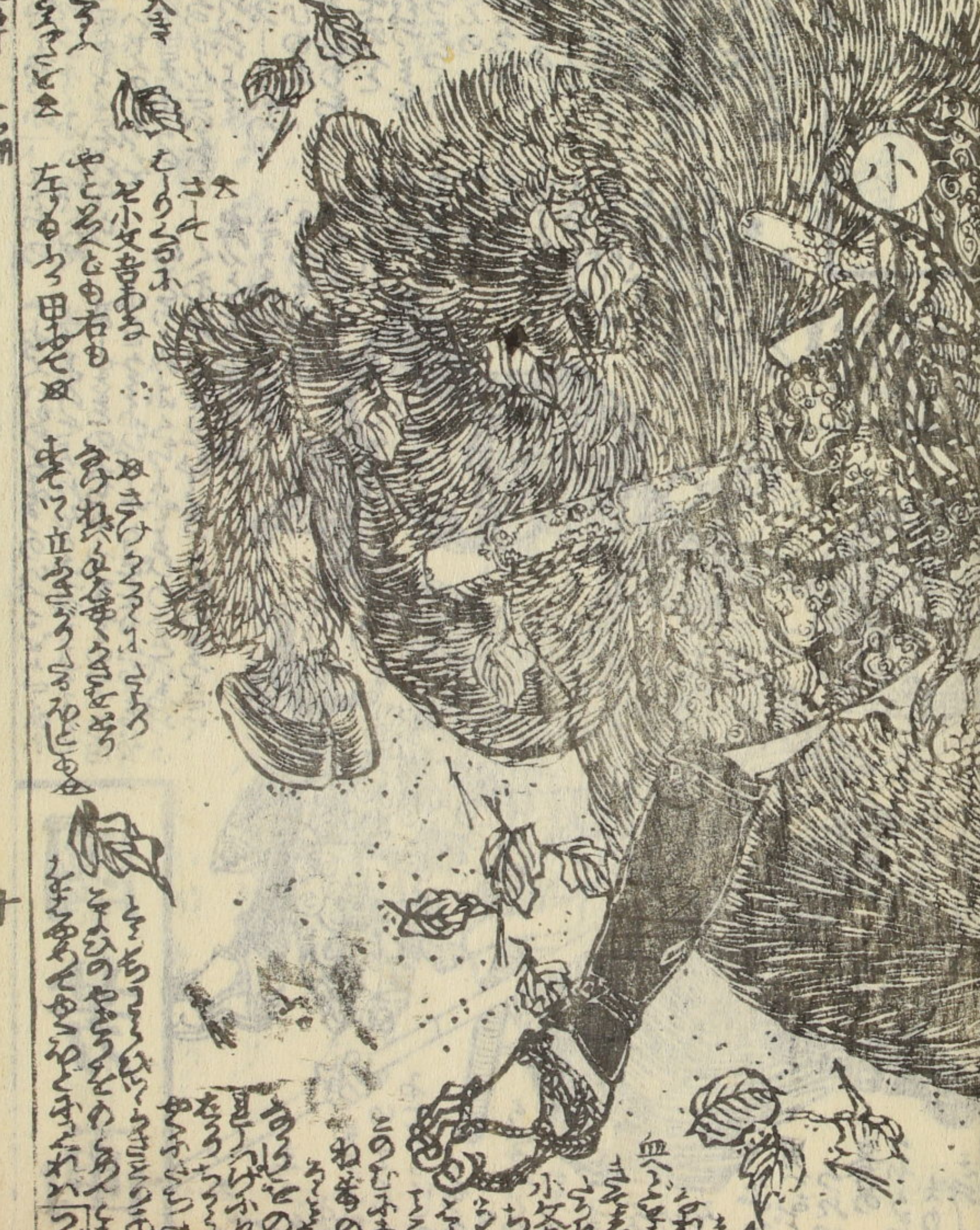
このうしは、昔のうしに
 比し、大に肥え、皮も
 厚く、肉も多し。昔の
 うしは、皮も薄く、肉も
 少し。其の故、何れに
 在らん。

このうしは、昔のうしに
 比し、大に肥え、皮も
 厚く、肉も多し。昔の
 うしは、皮も薄く、肉も
 少し。其の故、何れに
 在らん。

大八のうし
 人あま
 れ



大八のうし
 人あま
 れ



このうしは、昔のうしに
 比し、大に肥え、皮も
 厚く、肉も多し。昔の
 うしは、皮も薄く、肉も
 少し。其の故、何れに
 在らん。

大八のうし

十

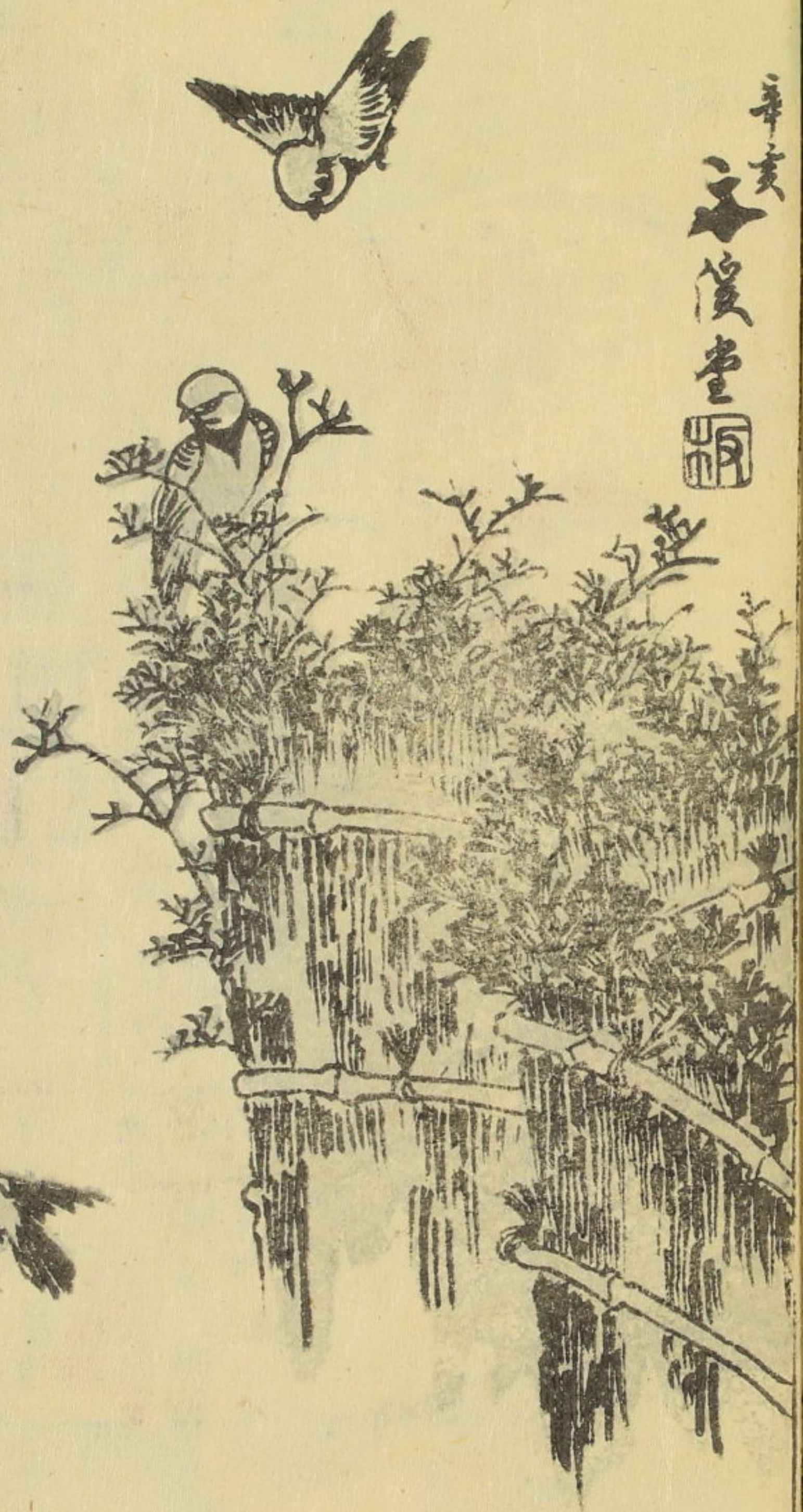
國芳画



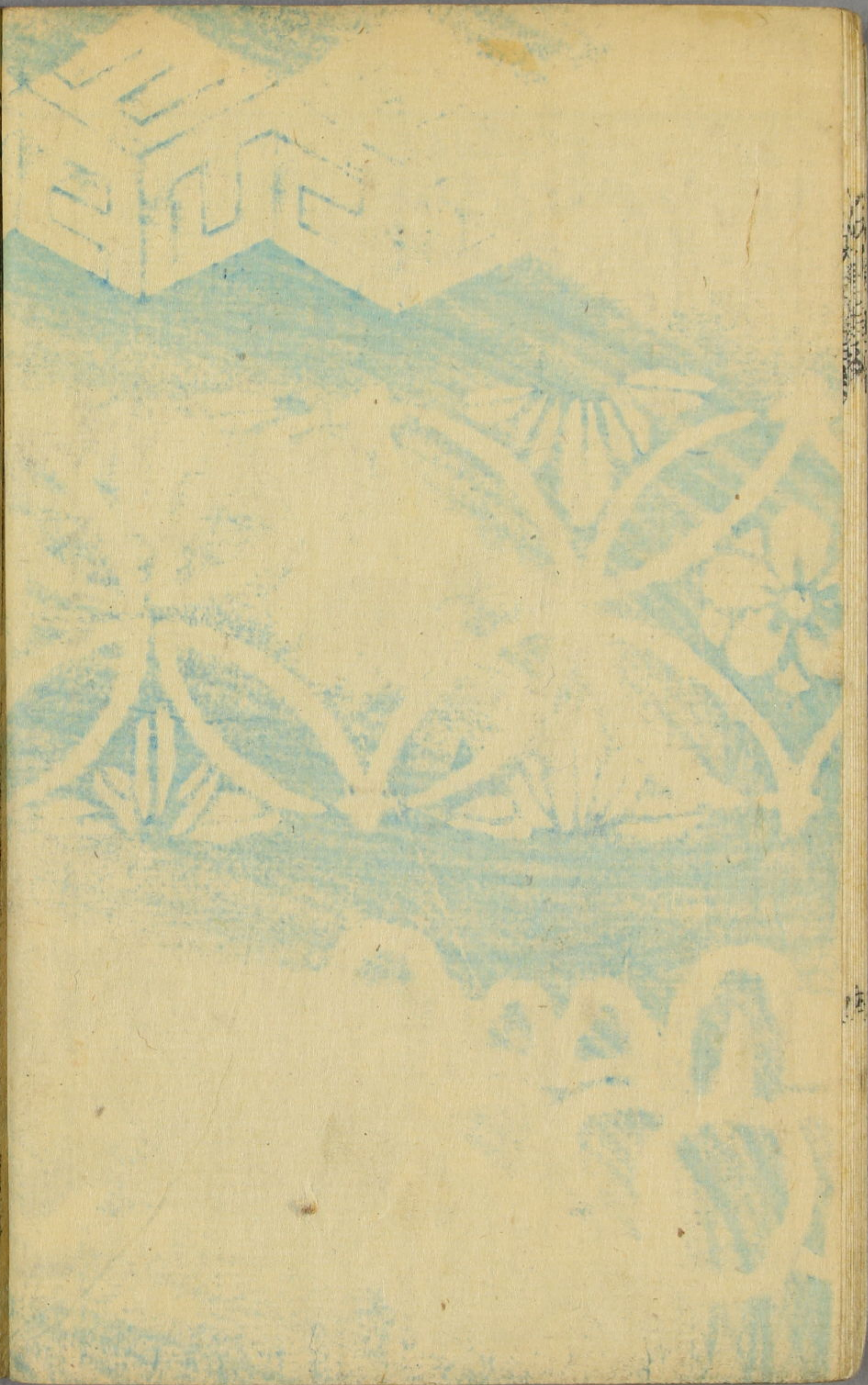
七寶の巻

Handwritten Japanese text, likely a commentary or a story related to the illustration. The text is written in a cursive style and is arranged in vertical columns. It appears to be a detailed account of the events depicted in the woodblock print, possibly including names of characters and specific details of the scene.

微名續文傳第十之編
為永化一勇齋畫



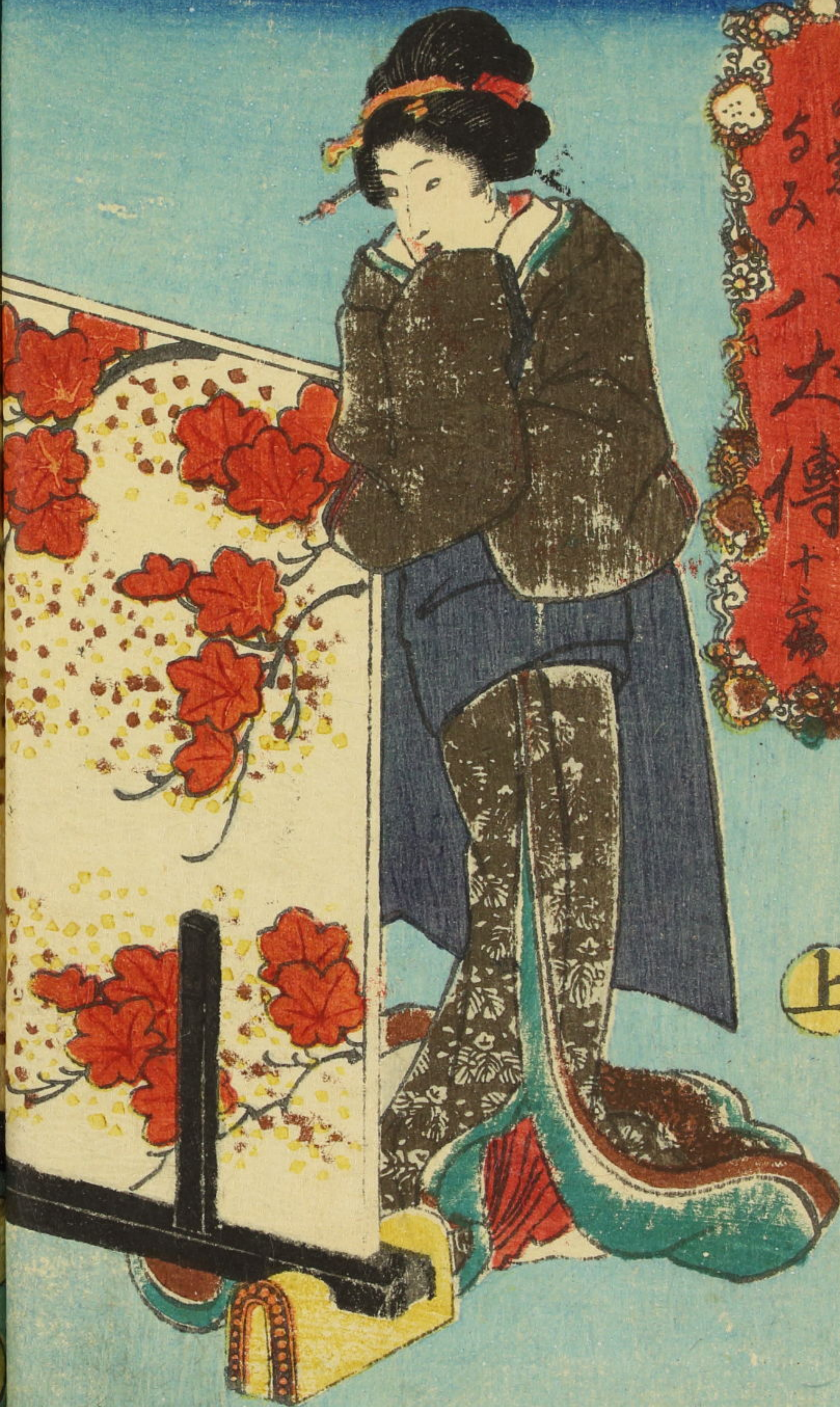
辛亥
永
畫
堂



爲永春水作
一勇齋國芳画

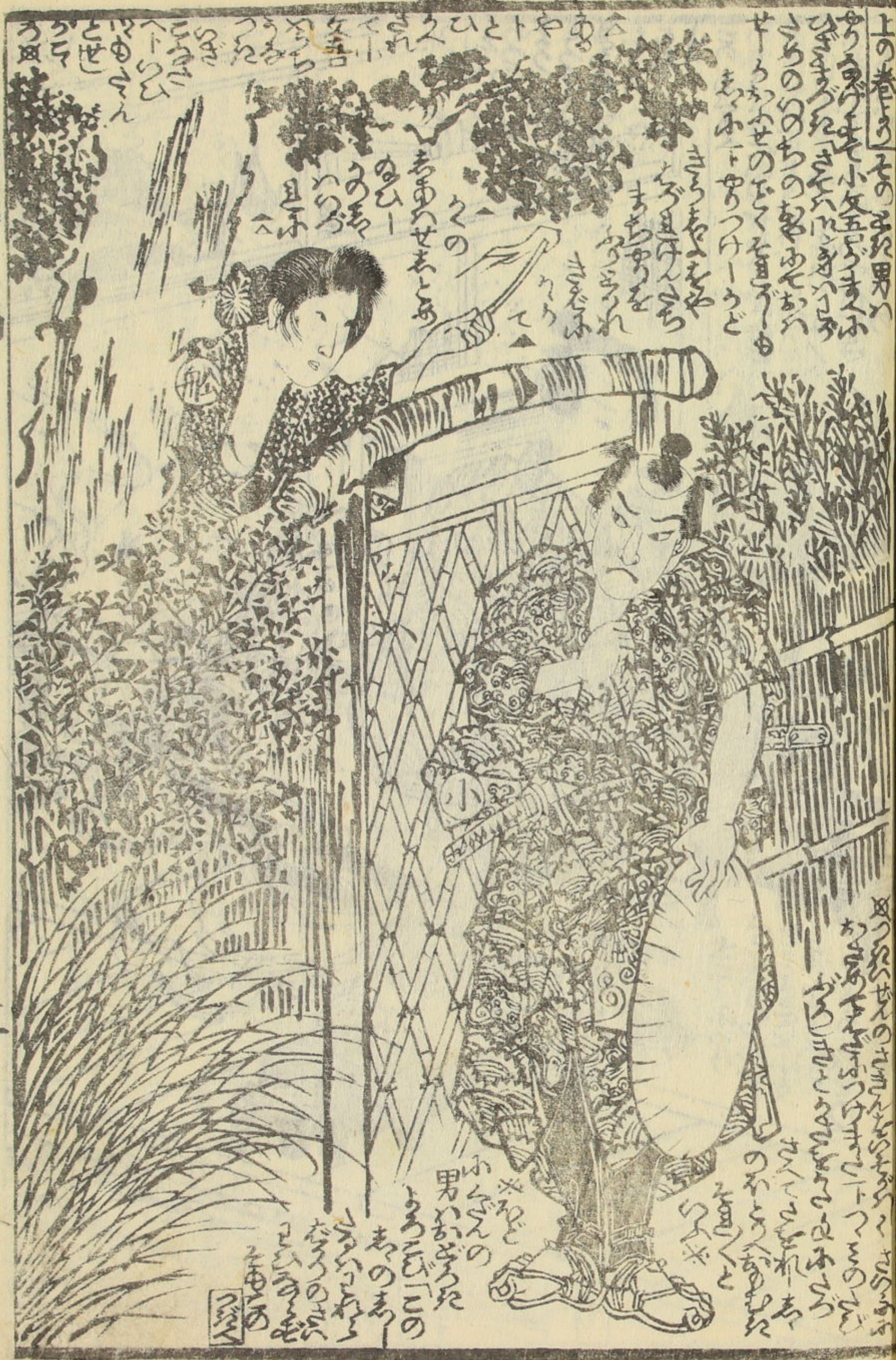


下



上

八犬傳
第十卷



入道三用



かき
たみ

十三
篇

喜水作
國芳画

嘉永四
年亥初葉
文溪堂梓



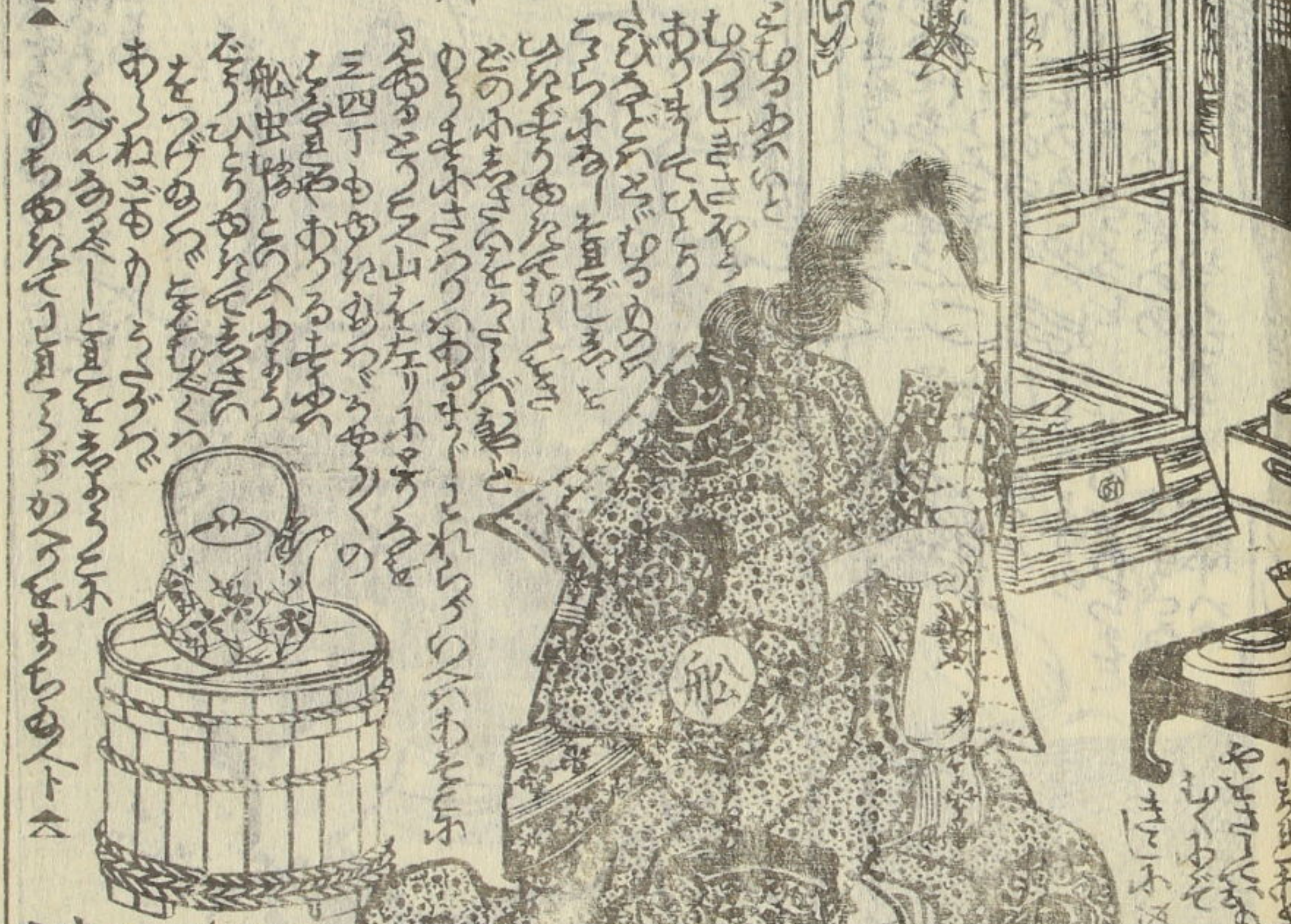
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな

あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな

あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな

あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな

あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな



あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな

あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな

あはれな
あはれな
あはれな
あはれな
あはれな



Handwritten Japanese text in the left margin of the right page. The text is written vertically in various styles, including a more formal 'kuzushiji' and a more casual 'sōsho' style. It seems to be commentary or dialogue related to the scene above.



Handwritten Japanese text in the right margin of the left page. It continues the commentary or dialogue from the other page, written in vertical columns.

一、大徳三條
 二、大徳三條
 三、大徳三條
 四、大徳三條
 五、大徳三條
 六、大徳三條
 七、大徳三條
 八、大徳三條
 九、大徳三條
 十、大徳三條



一、大徳三條
 二、大徳三條
 三、大徳三條
 四、大徳三條
 五、大徳三條



一、大徳三條
 二、大徳三條
 三、大徳三條
 四、大徳三條
 五、大徳三條
 六、大徳三條
 七、大徳三條
 八、大徳三條
 九、大徳三條
 十、大徳三條



一、大徳三條
 二、大徳三條
 三、大徳三條
 四、大徳三條
 五、大徳三條
 六、大徳三條
 七、大徳三條
 八、大徳三條
 九、大徳三條
 十、大徳三條



小
 五郎
 大田とあり
 馬加次大記
 村



小
 五郎
 大田とあり
 馬加次大記
 村

初雪や天は足跡梅の花と云誰か詠ふ

う知らぬも手もの

八房の巻め

又地入其足跡を



はんごんご

鳥は跡さるゝらば文字假名

読策子小寫せまも梅の花を

色香も多初雪をそ作文の淡雪

豆腐肉の淡々〜。そやう醬油味淋酒

足らぬやうきと肴官はねいふ合ぬと強つりて

又やうらけは十四編まご後輯の仕込も

あつた澤山ゆへ遊ばせとらん

嘉永辛亥孟春發兌



為永

春水誌

女田樂

且角野

春水誌



娘

手枕

栗飯原

夢之助

首の妻

稻城



馬加口
大記
常武

曾自介葉千三

栗飯原
首の度



おつちの夜ふらふら
つち心のまろふ
わびたねのその夜
ひと屋ふつるうせなり
そくまふまふ秋の夜も
おつちの夜

おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜



おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜

おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜



おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜



おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜

おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜
おつちの夜

大田傳七四續

しつぎに... 大田伝七の物語... 大田伝七の物語... 大田伝七の物語...

いふふのふあふのせ... 大田伝七の物語... 大田伝七の物語...



いふふのふあふのせ... 大田伝七の物語... 大田伝七の物語...

たふ小文吾知自勇... 大田伝七の物語... 大田伝七の物語...



いふふのふあふのせ... 大田伝七の物語... 大田伝七の物語... 大田伝七の物語...

大田伝七

Handwritten text in the top right corner, likely a list of names or descriptions related to the illustration.



國芳画

假名遣

Main body of handwritten text on the left page, including various characters and possibly names.

のり

とら美

八香ん

傳

十四編

為永美水他

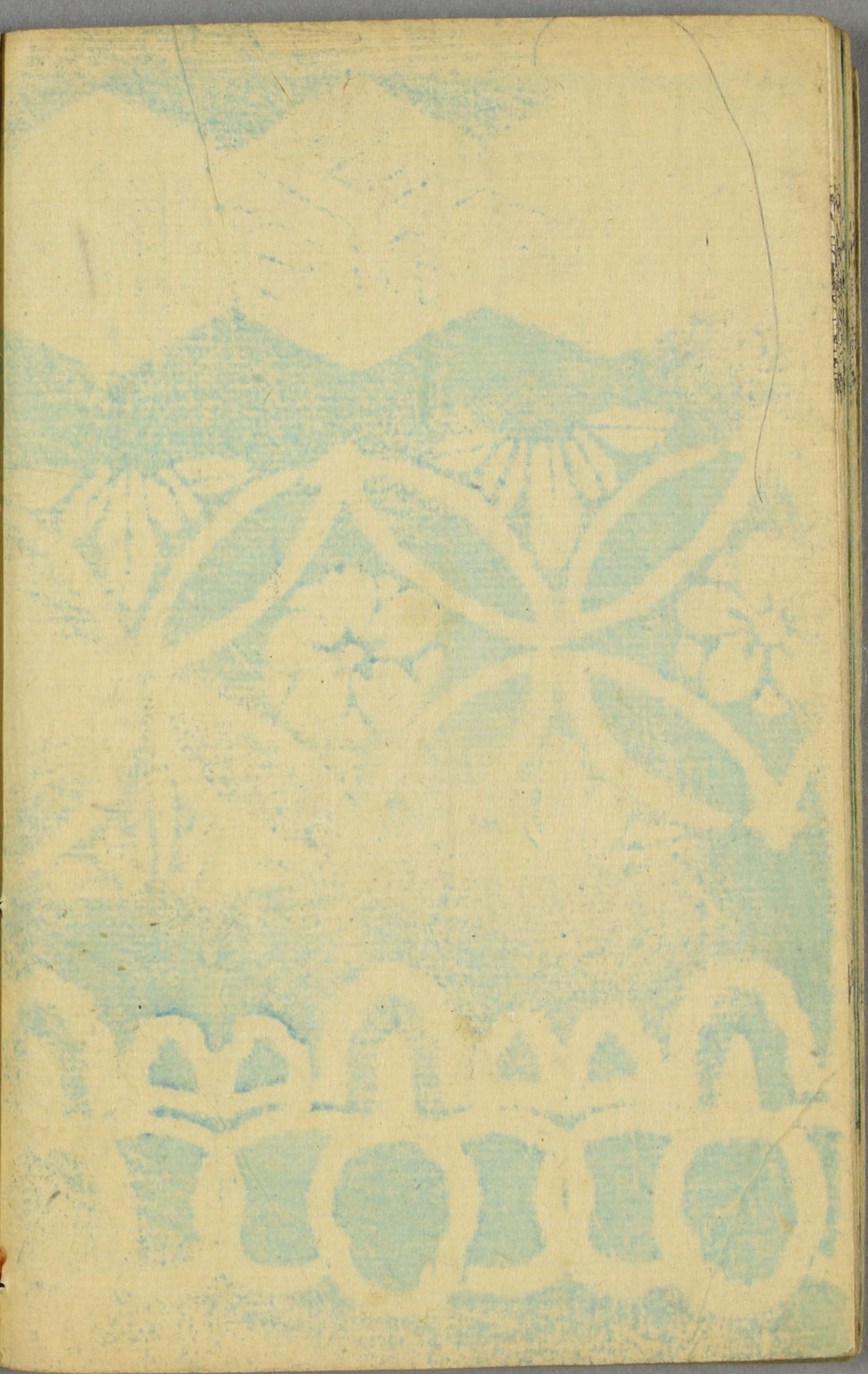
上の巻

一勇齋國芳画



文溪堂

書





かか
大傳十四
ひさ

下卷

爲永春水作
一勇齋國芳画



上卷

二の巻の...
小五郎の...
お七の...
お八の...
お九の...
お十の...
お十一の...
お十二の...
お十三の...
お十四の...
お十五の...
お十六の...
お十七の...
お十八の...
お十九の...
お二十の...



仮名續

八火傳

美水作

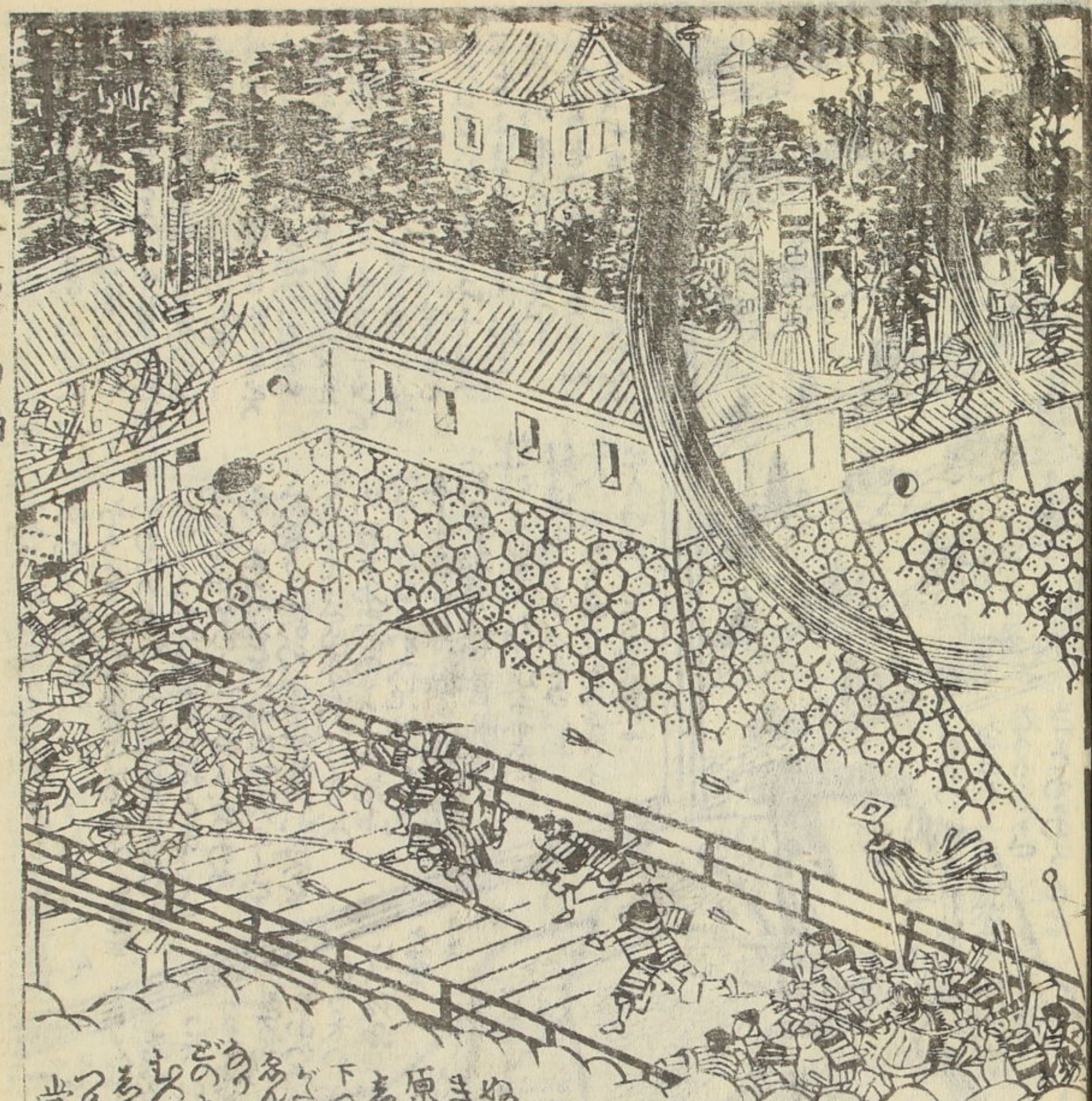
國芳畫

十四海

下
中

文庫書





千葉直房の城
 千葉直房の城は、石垣に木造の櫓や門を築き、
 城の周囲には堀や濠を掘り、防御を固めた。
 千葉直房は、この城を拠点として、地方を
 治め、勢力を伸ばした。城の規模は、
 東西約一里、南北約半里に及ぶ。城内には
 住居や倉庫、兵隊の宿舎などがあり、
 生活も営まれた。千葉直房の城は、
 戦国時代の重要な城郭の一つとして、
 歴史に名を残している。

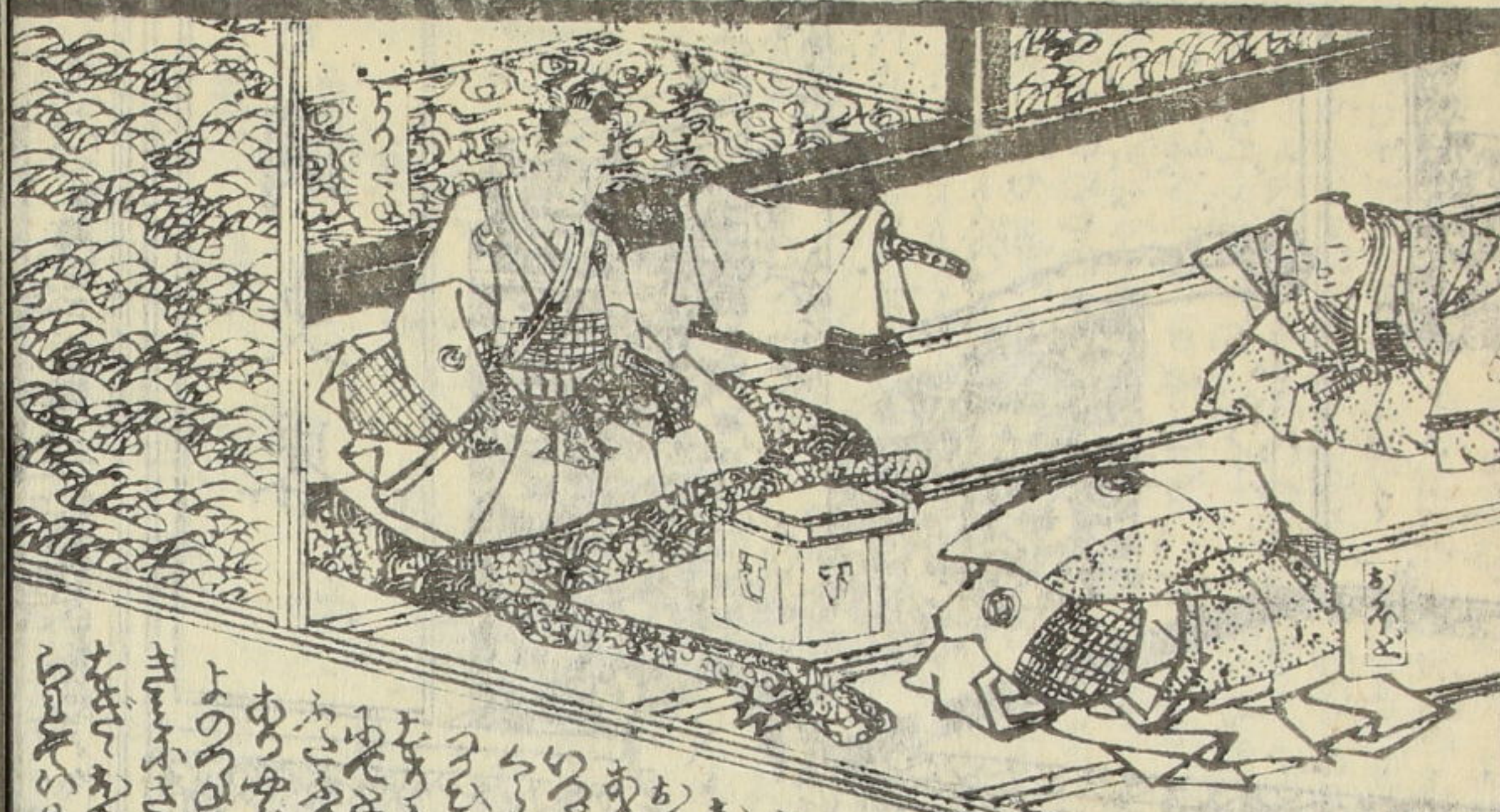
千葉直房の城



千葉直房の城
 千葉直房の城は、石垣に木造の櫓や門を築き、
 城の周囲には堀や濠を掘り、防御を固めた。
 千葉直房は、この城を拠点として、地方を
 治め、勢力を伸ばした。城の規模は、
 東西約一里、南北約半里に及ぶ。城内には
 住居や倉庫、兵隊の宿舎などがあり、
 生活も営まれた。千葉直房の城は、
 戦国時代の重要な城郭の一つとして、
 歴史に名を残している。

千葉直房の城
 千葉直房の城は、石垣に木造の櫓や門を築き、
 城の周囲には堀や濠を掘り、防御を固めた。
 千葉直房は、この城を拠点として、地方を
 治め、勢力を伸ばした。城の規模は、
 東西約一里、南北約半里に及ぶ。城内には
 住居や倉庫、兵隊の宿舎などがあり、
 生活も営まれた。千葉直房の城は、
 戦国時代の重要な城郭の一つとして、
 歴史に名を残している。

千葉直房の城



Handwritten text in Kuzushiji script surrounding the illustration of the women. The text is arranged in vertical columns and appears to be a dialogue or a description related to the scene.

Additional handwritten text in Kuzushiji script at the bottom of the right page, continuing the narrative or providing further context.

Handwritten text in Kuzushiji script at the top of the left page, positioned above the main illustration. The text is dense and covers several columns.



Handwritten text in Kuzushiji script at the bottom of the left page, positioned below the illustration. The text is arranged in vertical columns.

てあつて... 大傳十四卷

大傳十四卷

大傳十四卷

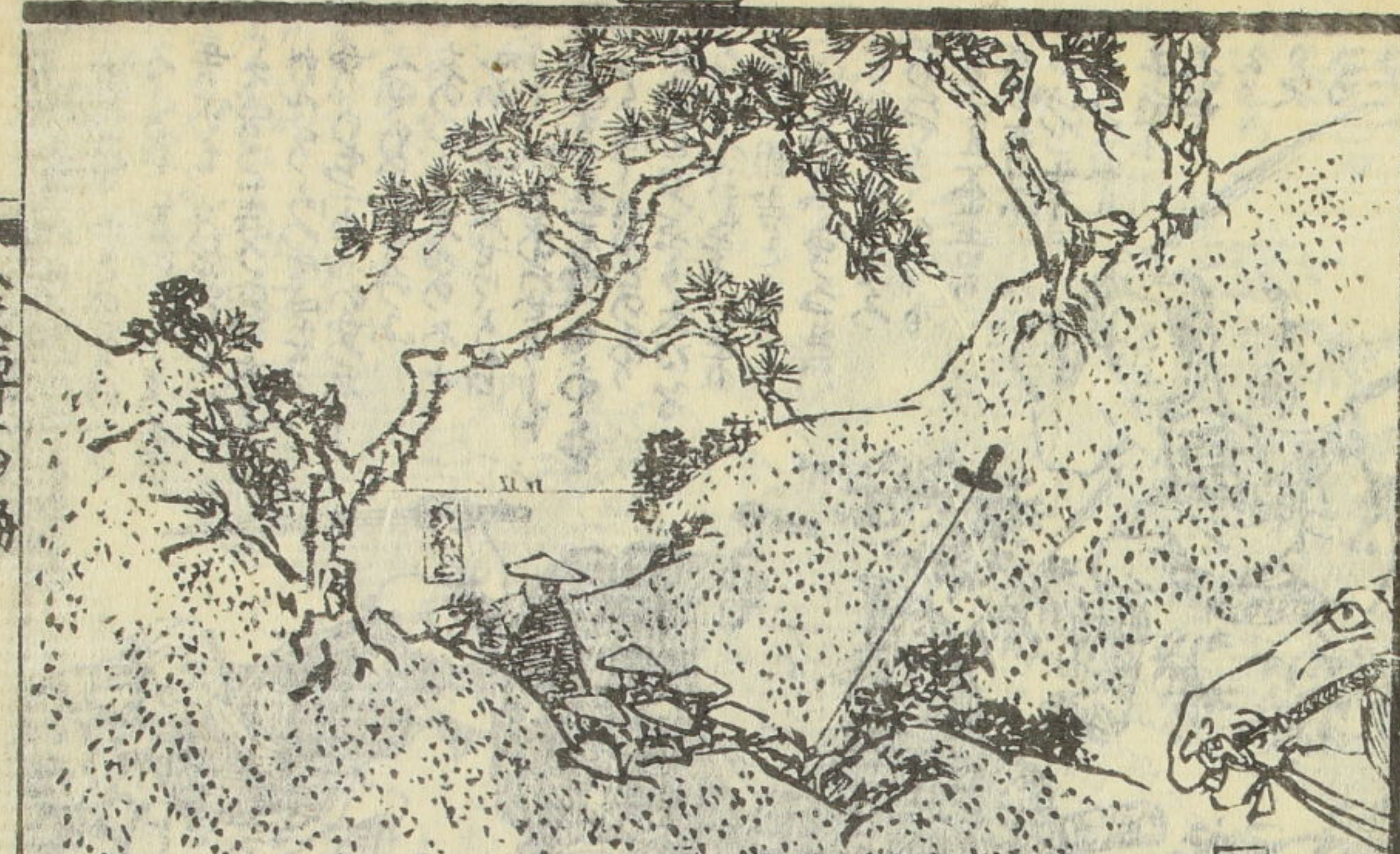
大傳十四卷



そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて



そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて



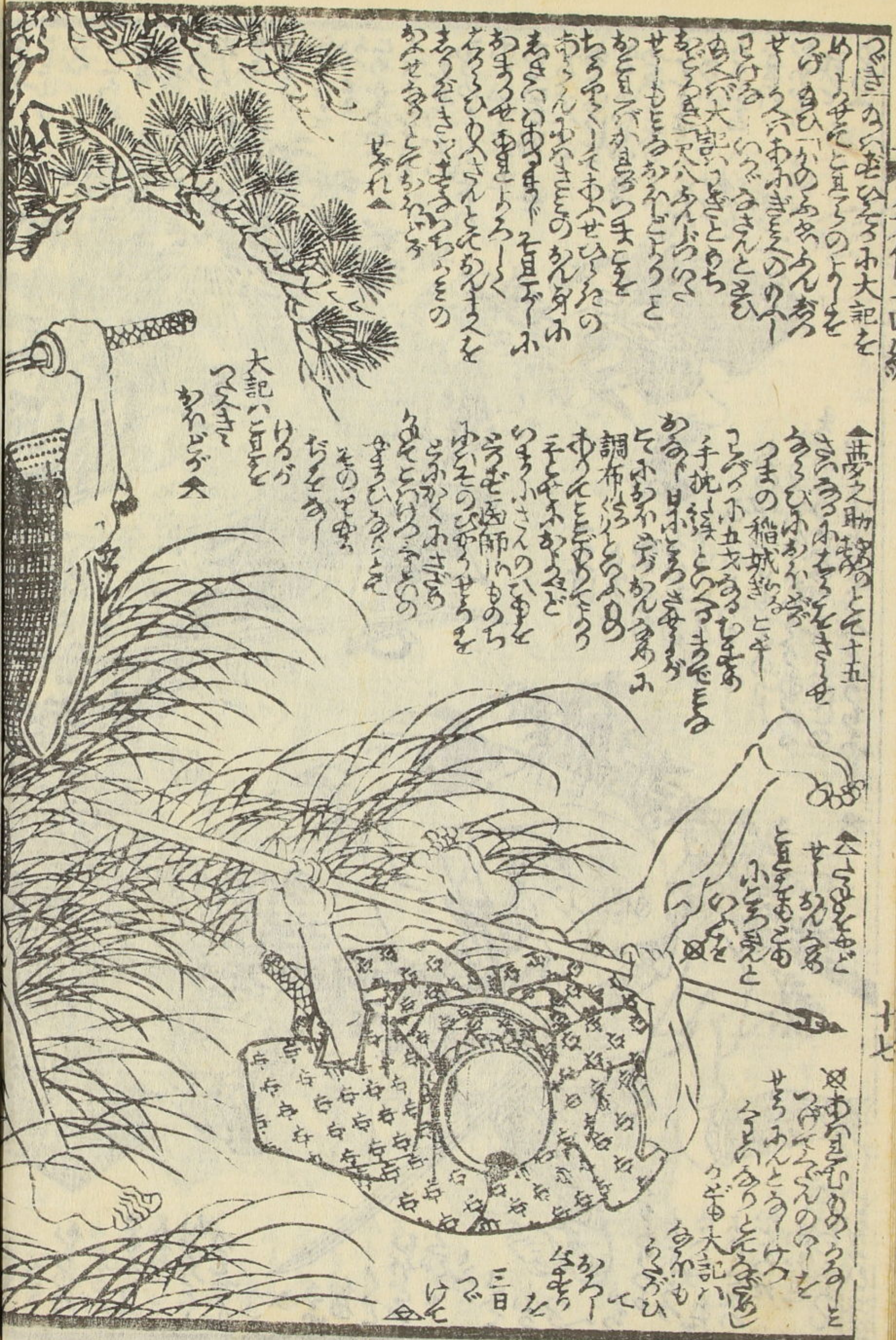
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて
そのしるしをあらわすに
あつたてまつりて



まのち

まのち

まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち



大記の
まのち
まのち

大記の
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち

大記の
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち

大記の
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち
まのち

Faint, mostly illegible handwritten text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

一勇齋國芳画の



ついでに
小文五郎
おぼろ
おぼろ

おぼろ
おぼろ
おぼろ

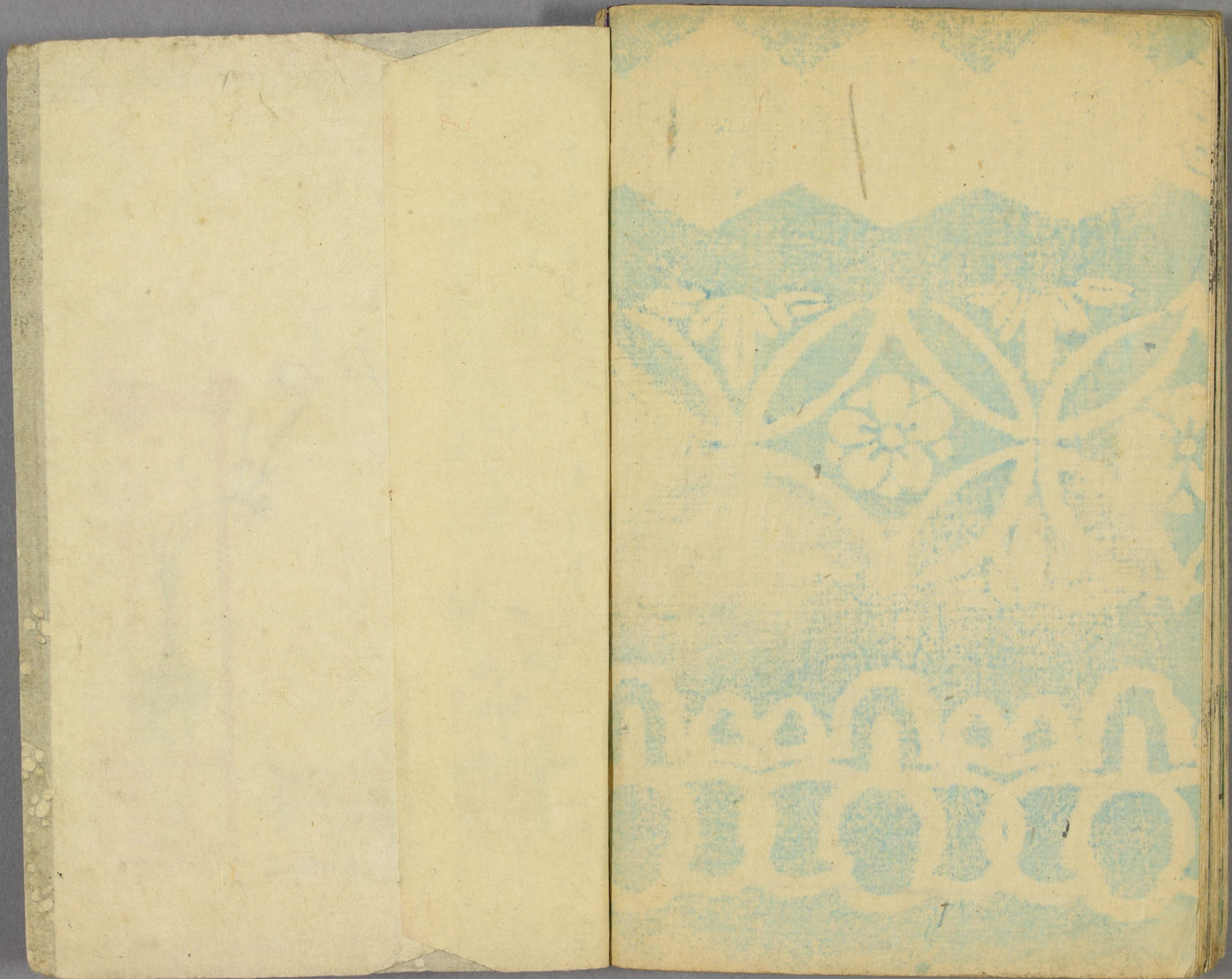
おぼろ
おぼろ

おぼろ
おぼろ

おぼろ
おぼろ

おぼろ
おぼろ

おぼろ
おぼろ



一
為
永
年
之
德
也



文
侯
堂



十
四
年

八
犬
傳

何
子



振
川
珠
光
堂

